学園夜業

ヨネネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学園夜業

【Ｎコード】
Ｎ５８５７Ｃ

【作者名】
ヨネネ

【あらすじ】
とある学園では、吸血鬼が多発している。その吸血鬼は男、女問わず襲い掛かってくる。そして、吸血鬼になると言う。学園では吸血鬼のことを『無死』と言う学園の人を守るのが、バンパイアハンターと言う組織が作られた。略してＶＨと言う。学園の方でも、夜の学校は注意しているが、来る人が多い。吸血鬼の臭いで誘われて来るのが多い。だが、夜の学園は、朝の学園の別の世界が存在していた。

【王、参上】〔1〕

【王、参上】〔1〕

月の光しか無い真っ黒な夜、都会の真ん中に立っている学園から静かに血の臭いが漂っている。

学園のグランドに横たわっている少女がいた。今は意識が無いみたいだ。

「うっ・・・・」

一人の女が目を覚ました。目を開けると回りは血で汚れていた。

「だいじょうぶ？」

一人の男の声が聞こえた。美声が脳で響いた。

「えっ・・・・？」

上を見上げると5人の男がいた。でも、顔が見えなかった。

「『無死』は追い払ったよ。もう家に帰りなよ」

髪の毛がぼさぼさの男が言った。

「は、はい・・・！」

女は急いで学園の門を開けて出て行った。

「で、どうしますか？」

髪が灰色の男の人が腕を組みながら言った。

「どうするもこうするも、いちお処理するしかないですよ」

不機嫌そうな男が言った。

「まぁ、我を忘れた人間を処理するのは、如何なものかと」

パソコンをいじっている男がのんきに言った。

「このままほっとくのも嫌だな」

と言うと〔それ〕を銃で撃った。そうすると砂のように消えていった。

「いくぞ」

その男の一言で5人の男たちは消えて行った。

空を見上げると満月だった。だが、学園から出てしまうと三日月だった。

不思議な事にさっきまで居た5人組みが居なくなっていた。まるで夜の学園が異次元のように・・・。

朝

「ふぁ・・・あ・・・」

眠たそうに目をこする、学園に向かう坂道を下っていく。少女が居た。髪の毛は長くも短くも無い。

うう。ねむい・・・。昨日あんまり寝られなかったからなぁ・・・・・。

あの頃のこと、思い出したからかな・・・？

小学校の頃・・・

ぶつかった男の人に急にキスをされたこと・・・・。

（もーなんで思い出すかな、こんなときにーー！！）

「おっはよー」

後ろからどつかれた。坂だから、上手くバランスを取れない・・・・！

「うぉぉぉ・・・」

無理に体を戻そうとしたけど、やっぱり転んだ。

「いっ、ものすごく痛い！」

背中をこする。いたい。そして、膝もいたい。

「ごめん、ごめん。つい、力が入っちゃって・・・」

私は、杉本　彩埜。そしてこの子は、市ノ瀬　月世。空手部で結構腕はいいみたい。

「何そんなに力入れることしたの？」

私はゆっくり立ち上がり服についた土をほろった。

「いやさ、昨日張り切って夜の学園にいったのさ」

「えぇぇぇぇぇーーーー！！！！」

私は朝からとてもうるさい声をあげ、月夜の肩を揺らした。

「な、な、な、なに言ってんの！？立ち入り禁止だって分かってるでしょ！！」

私は我を忘れ、月世の肩を強く揺すった。

「ははは、いやー。私の力で退治できるかって思ったら腕がなってさぁー！」

月夜の肩を揺らすのを止め、ため息をついた。

「はー・・・。んで、どうだった？」

「んー。やっぱ無理だった。ＶＨに助けてもらわなかったら死んでたかもね」

そんな笑っているなんて。本当にある意味恐ろしいよ、月世！

「んで！ＶＨの不義君！！めっちゃカッコイイ！！」

「え？誰それ」

「はぁ？うちのクラスの不義君だよ。知らなかった？」

「うん」

月世はため息をついて一呼吸置いた。そしてキッっと私の方を見て言った。

「決めた」

「え？何？」

「不義ファンになる」

「え！？」

「よし、正式に不義ファンになるわよ～♪」

「はぁ・・・」

結構すごいんだな、うちの女子。

そんなこと聞いたこともないし、あることも知らない。でも、この頃周りの処で部屋が増えた

ことは知っていたけど・・・。まさかね・・・。

「ん。どした？」

「いや・・・」

てか、私って結構鈍いのかな？

「ほら、走るよ！」

「あ！まってーー」

この瞬間が一番私の中で一番、楽しいのかも・・・。

いつも、こんな風にいられるといいな・・・・。

と、思う。

学園

学園に入るのがとても大変だった。

ちょうど、ＶＨの団体さんの登校時間だったのだった。

きゃーーーー！！とあちこちで叫び声が響いていた。

「きゃーー！空痲（そらめ）さんーー！！」

「ちょっと、あなた！なれなれしいまねはよしなさい！空痲様と言いなさい！！」

うぉ！結構厳しい・・・。てか、やっぱりファンの方々の人たちだよね・・・。ここらへん全部。

「あ！不義（ふぎ）君！！」

月世の足は速かった。もう一番前。特等席みたいだった。

「いやー、もっと早く不義君の魅力を知っておけばよかったー」

「ははは・・・」

まじ笑えない。てか、不義って誰よ。

「あれ？あの子って昨日の・・・」

茶色の髪でぼさぼさヘヤーの人。結構ワイルド系。

「ああ、危なく死にそうになった・・・」

小っこいメガネをかけている子。髪の毛は黒。ちょっとくせ毛が特徴の男の子。

「たしか、お前のクラスの子じゃなかったか？不義」

この人もメガネかけている人、結構背が高い。まぁこの人は知っている。だって会長だもんな・・・。

「たぶん。俺あんまりクラスの奴、知らないっすよ」

あぁ、月世が言っていた、不義ってこいつか。左側がちょっと髪の毛で隠れててちょいワルっぽい。あ、後ろの髪微妙にはねてる。

「ふふ、蒼（あお）は学園の生徒の名前おぼえてるもんね。学年、学級も」

わー。とても綺麗な人・・・。はねているのか、それともくせ毛なのか分からないけど・・・。結構紳士的の人なのかな？優しそう。

すると会長は、女子を掻き分けて月世の方に向かって、

「それで、市ノ瀬君。もう大丈夫かい？」

「え、あ。はい。昨日は有難う御座いました」

「いや、いいよ。大丈夫なら。もう馬鹿な真似はやめるように。いいね」

「はい」

「あと、学園の決まり事の処罰については、部活一週間休みだ」

「はい」

部活停止だけなのか。どんだけ、優しい処罰なんだろ・・・。もしすごく酷いのなら死刑・・

とか？

でも、それは犯罪か・・。普通は停学、あるいは学園追放！？（めぐるめくる妄想）

「ふむ。では」

くるッと会長が進もうとしたとき、急に大きい背中がなくなった。

はれ、ワープ？てか、大きい音が・・・。『ドサッ』って・・・。

そんな分けなかった。こけたのだった。

「・・・・・・・・・」

一瞬時間が止まったようだった。

ＶＨファンの女子たちも心配そうに見てる人と、驚いて声が出ない人、他・・・。

ゆっくり会長が立った。そしてメガネを直して、

「すまん、小石につまづいたのだ」

こ、小石って、小石でつまづくか・・・。アリでもよけるぞ、普通・・・。

「かっこいい・・・・」

なぜだろう。女子の目が逝っているように見えた。てか、隣で『カッコイイ』って・・・。

ははは・・・。なんて言うのかな・・・。

こういうのが格好良いのかは、私には分からない。てか、分かりたくない。

「ちょっといいかしら？」

後ろから強烈な怒り声がぁ・・・・。

「あなた、夜の学園に入ったようね。いい度胸してるじゃない」

「誰ですか？貴方がた」

月世、ちょっと声怖いぞ・・・。そういえば、前の学校では『怖い顔の月世』って言われてた
みたい・・・。自分がつけたけど・・・。

てか、うおぉ、5人いるぞ・・・。リボンでわかるけど、この人たち3年生だ・・・。

「私たちは『VHファン同盟』の会長の石原　美千代　担当、黒地(くろじ)　蒼(あお)様」

「同じく副、清水　冷架　担当、疏寺(そじ)　空痲(そらめ)様」

「同じく、野々村　利久　担当、知散(ちばら)　一(はじめ)様」

「同じく、蔵乃　梨浬　担当、荒口(あらぐち)　桂絽(けいろ)様」

「同じく、瀬野　市　担当、甥破(おいは)　不義(ふぎ)様」

なんだか、さらりと名乗られたけど、一瞬で忘れたよ。

てか、一人ひとりポーズ決めてんなおい・・・。

「夜の学園に入るなんて言語道断！！つまりVHを見る抜け駆けをしようとしたと言うこと！私
の蒼様を見ようなんて！」

Vファン（VHファン）の会長さんそのキラキラした髪どうにかならないかな・・・。

「そうよ！空痲様の華麗な戦いを見ようなんて！」

この人もすごいな・・・。

「一様のクールな戦いを・・・盗もうなんて！」

もしかして、これって一人ひとり台詞があるのかな・・・・。

「桂絽様の頭脳を使った計算を利用しようなんて！」

あぁ。やっぱり皆さん有るようで・・・・。

「不義様の血を振るわせるような戦いを！」

見たことあるのかい！？

「ゆるせない！！」

うわぁ・・・・。最後は、皆で決めたよ・・・・。これが先輩？？

私が思い描いていた先輩とはかけ離れてるな・・・・。とほほ・・・・。

「――――で？」

「・・・・で？ですってぇぇぇ！！な、何この子！！自分のした事分からないの！！？」

「罪ですわ！」

「ゆるせまんわ！」

「ムカつきますわ！」

「いい気になりすぎですわ！」

最後に『わ』っていらないような・・・。てか、ちょっと耳痛い・・・。

「私はそんな貴方たちが思っていることしようなんて思っていませんよ。先輩」

月世がちょっと見下ししたような声で言った。

「その態度、ムカつきますわね！！」

会長さんの手が月世の頬に当てようとした。

「な！！」

とっさに私は止めようとしたげど、間に合わない・・・。

やめて！！

ふと思うと、前に風と共に大きい背中が現れた。

「ふ、不義様！！」

「え・・・・？」

思わず顔を上げると大きい背中が私の目の前にあった。

一瞬だった。一瞬に出てきて会長さんの手をつかんでいた。いつのまに・・・。

「すみませんが、五月蝿いですよ、静かにしてください」

「す、すみません！只今立ち去ります」

と言って、さっさと去ってしまった。早いな。

「お前は先輩に言葉を慎め」

「う、うん」

月世にそう言うと立ち去ろうとした。

一瞬だけ不義君と目が合った。あ、赤い目。

少し、怖かった・・・。

「ねぇ、不義君かっこいいでしょ？」

「怖かった」

「え？」

「う、ううん！！なんでもないよ！早く行こ！」

私は月世の手を引いて学園に向かった。

少しの不安を胸に・・・。

放課後

「うーーーん」

結構勉強で机に向かっていると体が痛くてこまるなー。

「あれ？月世もう帰るの？」

「うん、あれだから」

「あ、そっか、休部」

「うん、じゃぁね」

そう言うと、月世はドアを開けて帰っていった。

「よし、私は部活に行こうかな」

そう言うと教室から出て行った。それを見ていた、不義だった。

部活

「先輩、どうすれば的にあたるんですか？」

後輩の声が聞こえた。

「えっとね、集中もいるけど気軽に、心を無にして撃てば上手く良くと思うよ」

「そうなんですか！有難う御座います」

私は弓道部。結構面倒見のいい先輩といわれている。と言う噂。

「きゃー！空痲様よ。綺麗ねー」

「華麗だわ・・・」

あの人って弓道部だっけ？だったけ？てか、あの人、空痲って言うんだ。初めて知った。

「よっ」

「わっ、圭介！」

肩を急に叩かれてドッキリした・・・。

「おいおい、そんなに驚くなよな」

「急に肩叩くからでしょ！あと、柔道はどうしたのよ」

「早めに終わらせたんだ」

「そうなんだ、結構強いって言う、うわさがあるらしいよ？そんなにすごいの？圭介」

「まぁ、な。先輩方には言われるよ」

「へー」

すごいな、圭介って・・・。

「おい、圭介！お前ら付き合ってんのか！？」

「ち、ちげーよ！」

「へぇーー」

なぜそうなるの？うちの男子ってこう言うの好きそう。

「ご、ごめんな・・・」

「？、なんで謝るの？」

「い、いや・・・」

なんだか気まずい・・・。かも。

「あぁ、俺もう行くわ、んじゃ」

「うん。またね」

そうだ、もうちょっと真ん中を意識して撃ってみよう。

意識を無に、心を無に、そして一点に集中・・・。

それはど真ん中に命中した。自分でもビックリ。

ワッっと歓声が聞こえた。

「先輩すごいですね」

「有難う」

「やっぱり、あんたの集中力はすごいね」

「有難う御座います、先輩」

後ろで小さな拍手が聞こえた。後ろを向いたら空痲が拍手をしていた。

「すごいね。君」

「あ、有難う御座います」

「やっぱり、蒼が言っていた通りだね」

「え？」

会長が言っていた？何を？

「あ、いや。なんでもないよ。それじゃ、頑張ってね」

ニコっと笑って、手を振りながら部室の方に戻っていった。

「いいなぁー。空痲様に声駆けてくれて」

「え？」

いや、本人は嬉しいより、ビックリが大きいのですが・・・。

「あぁ！！もう、こんな時間だ。私帰るね」

「うん。じゃぁねー」

「うん」

ふー、今日は色々あって大変だったなー・・・。

「ん？」

て、がみ？

『時は来た。今すぐお前を迎えにゆく』

・・・・・・・。

いたずら？か？

「まぁ、帰ろ」

あ、ＶＨ同盟の人たち、声だしの練習してる。

「Ｌ・Ｏ・Ｖ・Ｅ　蒼様！　空痲様！　知散様！　荒口様！　甥破様！！」

・・・・。聞かなかったことにしよ・・・。

・・・・あ。

「おう、遅かったな」

そこに日慈がいた。

校門の側で待っていたと思う・・・。てか、誰を？？

「どうしたの？誰か待ってんの？さては、彼女かな？」

「ち、ちげーよ！お前を待ってたんだよ」

ちょっと図星っぽいのですが・・・。

「なぜ？」

「わかんねーけど、なんか、一緒に帰りたかったんだよ。だめか？」

「ううん。いいよ、帰ろう？」

「あぁ」

だんだん日が暮れていく・・・。

「こうやって帰るのって久しぶりだね」

そう、こうやって帰るのは小さい頃公園で遊んで帰る時以来だった。

「そうだな・・・」

「うん。今日ねＶＨ初めて知ったの」

「おいおい、あれはある意味アイドル集団なのに知らなかったのかよ」

「うん」

「まぁ、お前。そういうの、興味なさそうだな」

「まぁね」

「ほめてねーよ」

「へへ・・・」

懐かしい、圭介とこんなに話すの。

「ねぇ、圭介」

「あ？」

「これ見てよ」

私は下駄箱に入っていた紙切れをポケットから取り出し、圭介に見せた。

「何だこれ」

「下駄箱に入っていたの」

あれ、無口になった。

「・・・・・。これ、意味わかんねーな」

「うん」

「てか、『今すぐ迎えにゆく』って」

「わかんない」

「よな」

「・・・・・・・」

でも、これって本当に嫌がらせかな？私そういうのに鈍いからなぁ・・・；

「今日は家まで送っていく。いいだろ」

「うん。よろしくね！ボディーガードさん♪」

何でだろう。なんか嫌な予感がしてくるの・・・。

「あ。電車」

「ここらへん、電車通り多いから気お付けろよ」

「はいはい、あ、渡ろう」

「あぁ」

歩きだした。

少し歩くとチョークで円が書かれていた。たぶん『ケンケン』をしていたのだろうと思った。

「ねぇ。カバン持ってて？」

「いいけど、どうした？」

「ふふ～ん。久しぶりにケンケンしようかなっと思って」

「はぁ？お前は子供か？？」

「いいじゃん、子供でも。私は永遠の１７歳～♪」

本当に久しぶりだな・・・。よし、ケン・ケン・パー・ケン・パー・ケン・・・・・。

「もういいかー？」

「あとちょっと～」

ケン・パー・ケンケンケ・・・・・。

途中に大きい体が待っていた。

「いた！！」

鼻が・・・痛い・・・。あ、謝んないと・・・。

「ご、ごめんな・・・・さ」

上を向くと黒い服で覆われている男の人が見えた。目がとても赤い。

「お前が、彩埜か？」

「そうですけど・・・」

「迎えに来たぞ」

その声に身体中震えた。

「・・・ほ・・へ？・・・・」

「彩埜！！」

ぐいっと圭介が、私の手首をひっぱった。

「圭介・・・！」

私たちは走った。沢山走った。あの人が見えなくなるまで・・・・。

私たちは公園、昔遊んでいた時のところまで走ってきた。

「はぁ、はぁ」

「大丈夫か？彩埜」

「う、うん」

「あいつだったのか？あの手紙」

「わ、わかんない。でも・・・・・」

「でも？」

「とても、怖かった」

「彩埜・・・・」

でも、あの震えは、怖かったんじゃ・・・。

「見つけたぞ」

「！！」

後ろを見るとあの人がいた。

「そんななんでこんなはや・・・・・く！」

一瞬で分からなかった。圭介が一瞬にして砂場の方に飛ばされた。

「圭介！！！」

「うぅ・・・」

生きている。ホッとした。でも背中を強く打ったみたいだった。

「あなた！なんてことするの！！」

「・・・・・」

「なんとか言いなさ・・・・ん！！」

急に頭を押さえ、引きつけてキスをした。

「んんぁ・・」

離せない！苦しい・・・・。こんなキス、いや！

『思い出した？』

・・・？何を？

『あのときのキス』

あ。

思い出した。

あの時のキスはこの人としたんだ。

そうだ、この人だ。

「この・・・・」

「ん？」

「ヤロォおぉ！！」

すごいスピードで相手の頬を殴った。すっきりした。

「いたーい！！！何するんだ！！君！」

「こっちの台詞よ！圭介を吹っ飛ばして、急にキスする相手を殴らない人は居ないわよ！！」

「ふ、覚えていたか、私の熱いキスを・・・」

相手は口の横を親指で拭くと立ち上がった。

「んー、まぁ、初めてのキスだったからねー。女の子は絶対に忘れられないよ」

「それじゃぁ、もう一回するか？」

「うせろ」

技を掛けようとしようとしたら、

「うぅぅ・・・」

「圭介！」

危なかった、忘れるところだった。

「大丈夫？」

「あぁ・・・」

圭介がハッとした表情で立ち上がった。

「あ、あの変態は！？」

「ここ」

アイドル立ちで手を振っていた。

そこで圭介のキックが入った。顔にめり込んでるよ・・・。

「いたいなぁ・・・（´д`；）」

「吹っ飛ばしたお返しだぁ！このやろう！」

「まぁまぁ、圭介・・・。ある意味この人、害は無さそうだよ？」

まぁ、最初は微々たけど、ね。

でも、不思議にこの人、傷、いつのまにか治ってる。

「まぁ、なんか結構匂いがだんだん出てきたな。彩埜よ」

「は？」

に、臭い？そんなに私くさい？

「私は、あそこの学園に用があるのだよ」

だから、どうした。

「一緒にゆこう」

は・・・・？

「ごめん、なんだって？」

私は耳の後ろ側に手をのせ、背伸びをした。

「だから、あそこの学園にゆこう。一緒に。そこの邪魔は抜いて」

指を指した方は、圭介を指していた。

「おい、何で俺が邪魔になってるんだ」

「あぁ、居たのか。雑草君」

手で望遠鏡を作っていた。何か変態に見える。まぁ、もう変態になっていると思うけど・・・。

「人をウザイように言うな」
ちょっと遠くで見たら漫才みたい。
「で、お前誰だ？」
「ん？私か？私は彩埜の彼氏」
「・・・・・・」
私達は呆然と変態を見ていた。
「じゃなくて、」
思ったより受けなかったんだ。てか受けないよ。悪い夢じゃ無かったらね。
「私は血夜牙と言う者だよ」
「まぁ、キモイ名前だな」
あ、結構傷ついたみたい・・・。土いじってるよ・・・。
「うう、まぁ、いい」
いいのかよ。
「本当は確かめたい事があったのだよ、あの学園の秘密を」
「秘密・・・？」

学園には、財宝が眠っているとか？かな？

「聞きたい？」

ブランコに座ってこいでいる。似合わない。てか、早いな・・・移動。

「うん」

「んじゃ、キスを求めるぞ」

圭介が気合をためていた。

「いや～、こう言うとどうなるか見てみたかったのだよ。本当に」

ニコって笑った。その笑顔はとても輝いていた。

「私たちバンパイアに必要なものがあるらしい」

「てか、バンパイアだったんだ」

二人して同じことを言った。

「おや？言っていなかったかな？」

言ってねー・・・。

「ふむ、私は、吸血鬼」

「そう単刀直入に言われると気持ち悪い」

圭介は結構、血夜牙のことは気に入らないみたいだな・・・。

まぁ、『おら、ゴクウ！』みたいな、感じでね・・・。

「なんで、彩埜を襲ったんだ？それが一番の疑問だ」

「うーんとね。君は吸血鬼の好きな匂いを持っているんだ」

「何それ？」

「うーん。なんて言うのかな？まぁ、吸血鬼を魅了する匂い」

「普通の人間には？」

二人は顔を難しくしている。

「普通の人間はそう感じない。まぁ、普通の匂いかな？」

血夜牙は両手をヒラヒラさせた。

「へぇ、お前そんな臭い出していたのか？」

「出したくて出てんじゃないよ・・・」

あぁ、なんかこんな話で結構暗くなっちゃった・・・。

「それじゃぁ、行ってみるとするか、学園に」

血夜牙はブランコをこぎ、良いタイミングでブランコから下りた。

私はとっさに、

「行かない」

「どうしてだ？」

血夜牙は不思議そうに私の方を見た。

「だって、校則。学園に行ったら怒られちゃう」

そう言うと血夜牙は私をヒョイっと上げて（お姫様だっこ）歩き出した。

「ちょっと！これある意味、無理やりよ！」

「大丈夫だ、我が絶対に何があっても守ってみせるぞ？」

な、急にそんな・・・・。マンガみたいなことさらりと・・・・！！

「それで、雑草君。君は行くのかね？」

まだその名前かい。

「あたりまえだろ！彩埜をほっておけないからな！！」

「子供みたいにいわないで・・・」

まじめに顔から火が出そう・・・。

学園　　校門前

私は、血夜牙から下ろしてもらい、学園の校門まで歩いていった。

「やっぱり、閉じてるね」

校門の柵の最長を見ようとするけど、首が痛い。まじめに大きいな・・・。こりゃ。

「あぁ」

当たり前のように、圭介が言った。

「久しぶりだ、ココに来るのは」

血夜牙も校門を見ていった。とても懐かしいような目をしながら・・・。

「え？来たことあるの？」

「ふむ、内緒だ」

私の顔に向かって、可愛い笑い顔した。帰ろう・・・と。

「あー！すまん！すまん！うそ、うそだぞ！教えるから早く帰ってこい！」

まじめに顔と中身、どっかで誰かと入れ替えたのかと思うよ・・・。

「我は、ココで生まれたのだ」

自慢げに腕を組んで言った。

「へー」

私は学園を見ながら言った。

「ふむ。あまりリアクションがないな・・・」

ガッカリしたように言った。そこまで落ち込むなよ・・・。子犬みたいな人だな・・。

「そ、そう？」

「ふむ・・、まぁ、いいか。早く入ろうか」

そういうと、血夜牙は私をまたヒョイと上げて高く飛んだ。

「わぁ！」

あの高い校門の柵を、いとも簡単に飛び上がって、飛び越えた・・・。

さすがバンパイア・・・。

「どうだ？」

血夜牙は誇らしげに笑った。

「もう一回！」

私は目を輝かせながら、言った。だって、こんなのどこの遊園地行っても無いもの・・！

「すまんな、また今度。ゆっくり二人で・・・」

「おい。こら」

圭介の方を見ると門の外にいた。すごい目をして見ていた。

ライオンが獲物見つけたような目になっている。

「どうした？入らないのか？」

血夜牙が、不思議そうにいった。

「入れない、のだが？」

圭介、すごい顔になってるよ??

「なんだ、雑草。お前は、地をもぐってこないのかね?」

あ、君づけで呼ばなくなった。ランク下がったみたい・・・。

「そういうのは、モグラだ。しかも俺は雑草でもない!圭介だ!!」

柵の鉄を力いっぱいに握っていた。この勢いで鉄が変形しそうな感じ。

どこの超人?

「ふむ、圭君」

「その呼び名はある意味小学校で流行った『あだな』だ・・・」

「圭君」

「殺すぞ」

なんとか学園の中に入れた。後ろの二人はもめているけど・・・。

よっぽど、血夜牙にお姫様抱っこされたことにムカついてるのかな?

でも、あれは、あれで絵になるけど・・・。BLのほうで・・・。

「ちょっと二人とも、ココからは静かにしないと見つかっちゃうよ」
「大丈夫だ、そんなときは私が助けやる」
「いちおう、俺も助けろよな」
圭介、まだ機嫌が悪いみたい・・・。
「・・・・・」
なんだろ。いつもの学園じゃなさそうな・・・・。感じ。
「どうしたのだ、彩埜」
後ろから血夜牙の声が聞こえた。
「うん、結構。朝の学園の臭いよりちょっと」
なんて言うのかな？この鉄の臭い・・・。
「血の臭いが多いか？」
急に後ろで声がした。
「だ、誰！？」
この三人以外の声が聞こえて恐怖が全身を覆った。
「いいにおいがすると思ったら、女か。このごろ女が多いな」

よく見ると、うちの制服を着ている。男の子。そして2年生の人、そして同じクラスの・・・。

「飯田君・・・」

クラスでは、あまり影が薄い人。でも皆に優しい男の子。

「やぁ、杉本。お前いいにおいだな。おいしそう」

「・・・・・！！・・・・」

怖い、目が・・・赤い・・・。もしかして・・・バンパイア・・・？

そんなわけ、そんなわけ・・・ない。・・・・よね？

「飯田君。どうして？」

「ん？なんか、学校帰りに『無死』に襲われちゃって、んでこうなったわけ」

「そんな・・・うそ・・！」

「俺もだよ、こんな風になったのは嫌だった。でも、お前の臭いを嗅ぐと、いい気持ちになるんだ・・・。なんだろ・・・。この気持ち・・・。お前が欲しいと俺の頭をよぎるんだよ・・・。なぁ、彩埜。お前が欲しい。欲しい。欲しい。欲しい。欲しい欲しい欲しい欲しい・・・・・欲しい！！！！！」

「・・・！！」

どうして？なんで？優しい飯田君が壊れて逝く・・・。私の知っている飯田君が・・・。

そう考えていると、飯田君が消えたと思ったら私のうしろにいた。

「え・・・？」

「いいだろ？少しくら・・・・」

ヒュッ・・・・！

後ろで音がした。後ろを見ると飯田君が倒れていた。

「ふむ、私の目の前でそんなことして良いと思ったか。この下僕が」

「なんだ！お前！」

血夜牙が私に近づいて頭をつかんで血夜牙の方に近づけた。

「私か？私は、彩埜の主。彼女と契約を交わした者」

いつ？いつそうなったの？ねぇ・・・？

「なにぃ！お前も『無死』ならそいつの臭い感じるだろ！なぁ！」

「ふむ、感じるな。いい感じに」

私は血夜牙の方を恐る恐る見た。いつもと同じ血夜牙の顔だった。

「だろぉ？なぁ、そんなら一緒に・・・」

飯田君が血夜牙を誘うように手招きをした。でも、血夜牙は私の肩を触って近くに寄せた。

「もう、彼女は私のものだ、誰にも渡さない。そして誰か彼女を食べようとしたら」

血夜牙の手に力が入ったのが分かった。

「そうしたら？」

「跡形なく、生まれたことを後悔してやろうかな？」

血夜牙のその言葉は一つ一つ本当に聞こえた。でも、最後の言葉はちゃらちゃらしてるように聞こえた。

「へ、へへ。そんな脅し聞くか！そんなの誰が決めた！」

少し動揺したように飯田君が言った。

「私だ、この私が決めた」

だんだん、性格が分かんなくなってきた・・・・。

「ふ、ふん！俺は不死身の『無死』だ！簡単に殺せない！」

「ふむ、やってみるか？下種よ」

「やってやろうじゃ・・・・ガァァァッッ！！」

急にその言葉が切れた。

「なんで・・だ？俺は不死身じゃぁ・・・ないの・・・・か？？」

一瞬にして砂となって消えた。

「な、何が起きたの・・・？」

私はちょっと動揺していた。同じクラスの男子が砂となって消えたのが。

「今度は、３人か。めんどな」

足音が聞こえてきた。

「まぁ、何もなくてよかったね」

「何もって、今、現在進行形で起きているんですよ」

「まぁ、一人は女の子だけどね」

ＶＨの人たちだと一瞬で分かった。ここを守っているのはＶＨしかいないのだから・・・。

「さて、どうしようかな？」

あ、ワイルド系の一さん。

「ん？君は確か今日、あの女の子と一緒にいた・・・・」

あ、空痲さん。

「杉本　彩埜さん」

あ、会長さん。

「どうして、不義さんのクラスの人が多いんですかね」

あ、メガネ君。

「知らねーよ」

あ、不義君。

「あの、すみません！この人にさらわれてココまで来てしまったんです！！」

必死だよ、圭介君。

でも、普通に無いよ。そんな話・・・。絶対にありえない。

「うわ！可愛い男の子！」

一さんが思わす桂絽君のメガネを取った。

「あ、そうだった。一さん、可愛い男の子スキでしたっけ？」

桂絽君がすぐに一さんからメガネを取り返していった。

「スキって言うより、抱きつきたいって言うか、犬っていうか！」

一さん。貴方と変わらないくらいの背ですよ。これが腐女子が好きなＢＬですか？

「どうしたんですか？」

ＶＨの後ろからとても爽やかな声が聞こえた。

よく、学園朝会でよく聞く声だった。そうだ、この声・・・。

「あらら、今日はいつもより、めんどいですねー」

「先生」

あれ？あの先生って、たしか・・・・。

「野呂先生！」圭介が言った。

たしかそんな名前だったようだったような・・・。

「あの、これは・・・その・・・・！」

すごく動揺している。まぁ、無理もないか・・・・。

「どうします？先生。記憶を処理しますか？」

蒼が私たちの方を向きながら言った。あれ？メガネしてないな・・・・。

「うーん。そっちの方が手っ取り早いですが・・・・。一人、見知らぬ人が混じっているのが気がかりですが・・・」

「ふむ！私を知らないと！？」

知るわけないじゃないの、てか、本当に血夜牙って・・・・。

「うん。見たこと無い顔だね？どこの人？」

先生が小学生レベルみたいに『どこに住んでいるのかなぁ』みたいな感じに聞こえるのは私だけ？

「ふむ、聞いて驚くな。私は・・・」

皆時が止まったように固まった。

「私は、吸血鬼の王の中の王。血夜牙だ」

本当に時が止まったようだった。

【王、参上】〔1〕（後書き）

ほとんど趣味で書いております。そこのところを宜しくお願いします／／＼○／　　ε＝＼／○ノ　イヤッホーゥ

【冷たく、誘う】〔2〕

【冷たく、誘う】〔2〕

「こいつは、頭が可笑しいのか？」

と不義が言うと武器を手にとって構えた。

「まぁ、普通、王と言うとココには居ないと思いますけど・・・？」

桂絽君がパソコンを弄(いじ)りながら言った。

「ねぇ・・・。血夜牙？皆信じてないみたいだけど・・・・？」

私は血夜牙の服を引っ張って言った。少しやばい事になっていると思った。てか、見ただけで分かる・・・。

「ふむ、そのようだな・・・」

血夜牙が頭をかきながら言った。って、何で本人は普通の顔なの・・・！？

手を叩く音が3回聞こえた。

「まぁまぁ、皆さん」

野呂先生の声が聞こえた。この人も冷静な事言ってる・・・。

「では、吸血鬼の王。王と言う証拠を見せてもらいましょうか？証拠が無ければ、ココで即、
貴方を殺しますので」
野呂先生がニヤッと笑った顔で言った。こ、怖い・・・。絶対この人は腹黒の腹黒だ・・・。
「ふむ。証拠がほしいか・・・。では・・・」
と言うと血夜牙は、私の顎(あご)を押さえ、上げて血夜牙の顔に近づけた。
これは、いわゆる・・・・。
キス・・・？
それは時が止まったように思えた。でも、進んでいることが分かった。
何か熱いものが口から伝わってくる・・・。
私はキスが終わっても、私は呆然として立っていた。また、奪われた・・・。キス・・・。
私は血夜牙の方を見た。でも、今までの血夜牙ではなかった。髪の毛は長く、漆黒の色だった。そして目はとても赤く、血の色だった。でも、その形の血夜牙は小さい頃に見たことがあった。
「これが証拠だ」

血夜牙の声が違っていた。少しカッコよくなっていた。男らしくなったのかな・・・？

そう言って大剣を出した。それが何かは、分からないけど・・・。私には・・・。

「ふむ、『魔剣ディライフル』か・・・」

野呂先生が腕を組みながら言った。

「先生。その『魔剣ディライフル』とは何ですか？」

蒼さんが野呂先生の後ろから聞いた。私も聞きたいな・・・。

「『魔剣ディライフル』とは、昔から吸血鬼の王が受けずいている魔剣だ。本当に王だとはな・・・」

野呂先生は頬を掻きながら言った。本当にこんな先生居たかな・・・？

「分かったか？人間共。俺が吸血鬼の王で、魔界の長と言うことも・・・」

そう言うと血夜牙の手から魔剣が消えた。その瞬間、元の血夜牙に戻った。

「で、魔界の長が何故こんな所に来たのですか？」

野呂先生がまったく『それ』に動じないように言った。本当に顔の表情が読めない先生だな、この人・・・。

「ふむ、この学園には、吸血鬼に必要な力が眠っている。だが、その力を利用しようとしている奴らが居ると言う話を聞いてな、直々に私が来たのだ。まぁ、ココの管理は私がしているが・・・」

私は血夜牙の横から聞いた。

「でも、血夜牙って魔界の王でしょ？何で王が来るの？」

誰もがそう思っているはず。血夜牙はニコっと笑って言った。

「自分で確かめたかった。それにココを狙おうとする奴らが気になるしな・・・。吸血鬼の力を欲(ほっ)していると言うことは、吸血鬼の間外者」

「まがい・・・もの・・・？」

「ふむ、吸血鬼に慣れなかった、まぁ、ハーフか、そう言う奴を『間外者』と言う」

魔界にもハーフって居たんだ・・・。でも、それって・・・。

「吸血鬼が人間と結ばれる事など許されることではないだろ！！」

そう言ったのは何故か不義君だった。

「人間が吸血鬼を好きになるはずが無い・・・。あってはならない・・・！」

どうしたんだろう・・・。急に不義君の顔が怖くなっている・・・。それに汗を掻いている・・・。

「貴方の事情は分かりました。で、これから如何(どう)するんですか？王？」

野呂先生は不義君を無視して話を進めた。本当にすごいな、この人は・・・。

「ふむ、単刀直入に言うと、しばらくココで暮らそうと思う。まぁ、潜入捜査かな？」

何も問題ないように言った。でも、私はまだこの状況を把握(はあく)していない・・・。

だって、こんな事現実にあってたまるものですか・・・・！！

「では、参ろうか。彩埜」

血夜牙はいつの間にか私をお暇様抱っこをしていた。

「え・・・！？」

私は動揺していて言葉が出ない・・・・。

「あぁ、そうそう」

血夜牙は何かを言い忘れていたようだった。くるっと皆の方を向いて言った。

「野呂と言ったか？」

「ええ。何かな？」

野呂先生はニコっと笑って言った。少し怖かった・・・・。

「えっと・・・・」

血夜牙は少し考え、私の方に顔を近づけた。

「ねぇ」

「何・・・？」

「この団体さんの名前って何って言うの？？」

だ、団体さんって・・・・。ＶＨってこと・・・？

「えっと、『バンパイアハンター』略して、ＶＨ」

「ふむ、それに入らせて貰おうかな？野呂」

な、なに言ってんの！この人は！！そんなこと言って『いいよ』な

んて言うわけない！！

「いいですよ？」

ニコっと笑って許可してくれた野呂先生。

「なんで！！？」

その場に居た、不義君と桂絽君、圭介、私達は声をそろえて言った。

「何で、ですか！先生！！」

と不義君が野呂先生の肩をつかんで言った。

「そうですよ、先生！何故この人たちをＶＨに入れるなんて・・・！」

桂絽君がパソコンを閉じて言った。相当、動揺している様子だった。

まぁ、誰もが駄目だと思っていたからだと思うけど・・・。

「まぁ、いいじゃないですか・・・。楽しくなりますよ？」

野呂先生は他人のように言った。まぁ、担当の先生だし、決るのは先生次第か・・・。

「ですが・・。先生・・・！」

桂絽君が力一杯にして言った。

「桂紹君？分かってくれますよね？」

一瞬その場が凍りついた。私だけかも知れない。でも、さっきの先生の声は怖かった。

「は・・・・はい・・・・」

恐る恐る言ったような声だった。冷や汗が出ていた。少し唇をかみながら・・・。

「血夜牙さんでしたか？」

野呂先生はこっちを向いて歩き始めた。

「ふむ、血夜牙でいい。これから、ココの学園に通うことになるからな。野呂先生」

血夜牙は私を下ろして言った。血夜牙の目は輝いているように見えた。

「では、血夜牙君。ようこそ、ＶＨへ。歓迎するよ」

野呂先生が手を差し出して握手を申し込んだ。血夜牙はそれに応じて握手をした。

ちょっとだけホッとした。なんでホッとするの私・・・。

「分からない事があったら蒼君に聞くんだ。ＶＨのリーダーだからね。あと空痲君は副だ」

そう言うと蒼先輩が前に出てきて、自己紹介をした。

「蒼だ、よろしく。学園の会長をしている」

「僕は空痲。ＶＨの副を任せてもらっている。よろしく」

血夜牙は一人一人握手をした。不義君は不機嫌そうに握手をした。桂絽君もそうだ。

「へぇー。魔界の王かぁ。そんな風に見えないなお前・・・！」

一先輩は暢気(のんき)そうに言った。まぁ、誰もかもがそう思われるけど・・・。

「ふむ、よく言われる」

あ、言われるんだ・・・。

「でもさ、『ふむ』とかさ、その言葉遣いどうにかしたらいいんじゃない？」

一先輩が手を頭の後ろで組んでそう言った。

「そうか、そうだな。まぁ、色々教えてくれ」

血夜牙が少し悩んだように言った。一先輩とは上手くいきそうに見えた。

「いいよー。ちやっきー」

「ちやっき・・・・？」

血夜牙が少し困った顔をした。

「だって、お前『血夜牙』だろ？だから『ちやっきー』」

一先輩がニコッと笑って言った。

「うん、良い名だ。はじ」

血夜牙も負けず、一先輩にもニックネームを付けた。少し短くなっただけだけど・・・。

二人は笑っていた。本当に仲良しになったようだった。

「で、血夜牙君。この二人はどうするの？」

野呂先生が私達の方に指を指して言った。

そうだ、自分達の立場を忘れるところだった・・・。殺されるか、記憶を消されるか・・・。

どっちにしてもいや・・・！

血夜牙はこっちに歩いて来た。少し怖かった。自分がどうなるかって事に・・・。

私はとっさに目を閉じた。少し震えていた。血夜牙は気づいてるのかな。私が怖いと思っていることに・・・。

血夜牙は私の頭をポンっと叩いて言った。

「彩埜もＶＨに入れてくれ」

へ・・・？何だって・・？ＶＨに入れてくれ？？

「やっぱり貴方は気づいていたのですか？彼女の性質と能力に・・・」

野呂先生は最初っから言う事を分かっていたように言った。しかも、能力って何・・・？性質？？

「それもあるが、一緒に彼女と居たいのだ。私は」

それは、少し日本語に直すとちょっといやらしい・・・！いや、いやらしいよりも、危ない系ですか！？告発！いや告白なのか！！？頭がごちゃごちゃして・・・！

「次は女か、今日は疲れることばっかだな、おい・・・」

不義君は迷惑そうに言った。本当に迷惑そう、ごめんね・・・。私だって入りたくって入るんじゃないのに・・・。

「いや、逆に歓迎だよ、彩埜さん。貴方の力があれば、仕事も楽になる」

蒼先輩が手を差し伸べた。多分握手なのだろうと思った。

「いえ、こちらこそ・・・よろしくお願いします・・・」

私は少し照れたように握手をした。うわぁ、蒼先輩の手ってこんなに大きいんだ・・・。

「ヨロシクね、彩埜さん」

ニコッと笑って空痲先輩は蒼先輩と一緒に手を出した。

「こちらこそよろしくお願いします。空痲先輩・・・」

また、私は照れくさそうに言った。空痲さんは、ニコッと笑って

「空痲でいいよ。彩埜さん」

「そんな!空痲先輩は先輩ですし!!」

私は手を早く動かして否定した。

「じゃぁ、空痲さんでいいよ」

空痲さんはくすくす笑いながら言った。

「ちょっとごめんね」

血夜牙が空痲さんと私の間を割って入ってきた。

「と言うわけで、今日は帰らせてもらいますね」

そう言うと血夜牙は私を抱えて、出て行こうとした。

「ちょっと、待ってください、血夜牙君」

「はい。なんですか？」

本当に生徒と先生だな・・・・。

「これ、制服だよ。あとクラスは彩埜さんと一緒にしておくよ」

野呂先生は、ニコッと笑って血夜牙の手にポンッと置いた。

って、待って。さっき、私と同じクラスって・・・。

「待って下さい！なんで血夜牙と一緒なんですか！！？てか！血夜牙って何年生！！？」

私は動揺していた。野呂先生はニコッとまた笑って説明し始めた。

「君は確か一年生だったね？まぁ、君と一緒の方が良いだろうしね。それに、血夜牙君は君と
一緒じゃないと嫌がると思うしね？」

のん気そうにニコニコ笑って言った。まぁ、半分は当たってるし・・・。

「さすが！野呂先生。分かっているじゃないですか！」

血夜牙はそう言うと私に抱きついてきた。私は一生懸命血夜牙を離そうとするけど、離れな

い・・・。

「では、明日から忙しくなると思いますが、宜しくお願いしますね？彩埜さん。血夜牙君」

皆の視線が痛い・・・。私ってこれからどうなるの・・・？ねぇ、魔界の王さん。吸血鬼の王さん・・・！

「はっ！」

それから目覚めたのは自分の部屋だった。そして私のお気に入りの『キュウッリ』（キュウリの形をしているぬいぐるみ）を抱いていた。昔お父さんに買ってもらった物だった。

私はカーテンを開けて青い空を見て言った。

「もうすぐ、命日だなぁ・・・」

「誰のだ？」

急に後ろから抱きつかれて鳥肌が立った。その声は血夜牙の声だった。少し寝ぼけている声だった。

「ちょ、ち、血夜牙！！離して！」

私は向きを変えて血夜牙の肩を掴み力強く離そうとした。でも、寝ぼけているせいか、離れない・・・。

「なぁ、誰の命日なのだ～～？」

私は我慢できなくて、蹴り飛ばした。少し経ってから体を起こし始めた血夜牙。

「お前の命日にするわよ」

私はベッドから降りて布団を整えながら言った。

「で、本当は誰なの？？」

血夜牙は足を組んで聞く体制をとっていた。目はとても興味心身だった。

「・・・。お父さんとお母さんの命日」

あまり思い出したく無かった。死んだのは私が小さい頃の事だったから、覚えていないけど・・・。

「そっか。だから誰も居なかったのか。猫ぐらいしか」

と言ってヒョイッと抱き上げた。猫の名前はライ。男の子、寂しい時は一緒に居てくれる私の大切な友達。

物心が着いた時に居た。私以外に抱かれるのは嫌がるのに、血夜牙は嫌がらないんだ・・・。変わった猫だな・・・。

「こいつは良い猫だぞ。性格も良い」

血夜牙はライの頭を撫でて言った。気持ちよさそうにゴロゴロ言っていた。

「分かるの？」

私はライを見ながら聞いた。ライはこっちを見て、私の方に来た。そして私の足元を回っていた。

「まぁ、目を見れば分かるよ」

私の方を見てニコッと笑った。朝からそんな・・・。綺麗な笑い顔見せないでよ・・・。

「ふーん・・・。って！今日は早く学校に行かないといけなかったんじゃん！！」

そうだった。今日は野呂先生が話があるって言ってたから早く来てって言ってたから早くしないと・・・！

「そうだったのか・・・。じゃぁ、行ってらっしゃい」

血夜牙がのん気に手を振っていた。

「あんたもだよ」

そうだったような顔をしていた。ちょっとムカつく・・・。

なんだろう、周りの視線が気になるのは・・・。

学園の門を入ってすぐに、女の子達は振り向いたり、騒いだり、気絶したり、鼻血出たり・・・。めちゃくちゃだな、この学園は・・・！

「なぁ、彩埜？」

血夜牙が心配そうに私の耳元に顔を近づけた。そんなに近づかなくても聞こえるから・・・。

「何？血夜牙」

「何故、女の子達は騒いでいるのか？」

はぁ！？自分の顔、鏡で見たことある！？美形だよ！？芸能人でも

こんなカッコイイ人居ない
ような顔してるあんたに皆ビックリしているんだよ！？認識してよ
！！

「血夜牙がカッコイイから、皆吃驚(びっくり)しているんだよ・・・」

「そうなのか？彩埜は私の事、カッコイイと思っているのか・・・
？」

急に甘えるような子供の声が聞こえたように思えた・・・。ちょっ
と吃驚・・・。しかも私、
歩くの止まっちゃったし・・・！

しかもこんな人気(ひとけ)があるところでそんな・・・！！

どこのイチャイチャムカつくカップルだよ！！

「彩埜？」

私は恥ずかしくなって走り出した。もうその場に居られないような
感じが！！しかも女子の痛
い視線とか気になる・・・！！

「彩埜、こっちだよ？」

私は何故か体育館に向かっていた。血夜牙は瞬間移動みたいに移動
していた・・・。てか、生
徒玄関のあるところ良く知っていたと思ったよ・・。

私は恥ずかしくてまた走り出した。今日は何か散々な日になりそう・・・。

「君達を呼んだのは、これからの事を説明するために呼んだんだ。だから安心して聞いてくださいね？彩埜さん」

野呂先生は私の方を見てニコッと笑顔を見せた。私は恥ずかしながら「はい」と言った。私の顔はそんなにおびえていたのかな・・・？

でも、野呂先生のところって何か豪華だなぁ・・・。何でだろ？もしかしてココが噂の『理事長の部屋』？

めったにココに入れないと言う貴重なところ！クラスで1・2居るか居ないかの、入れない部屋なのか！！？

でも、何で野呂先生がちゃっかりその椅子に座っているんだろう・・・？謎だ・・・。

しかも、右には会長の蒼先輩と、左には可憐で優しい空痲さんが居るなんて・・・。安心よりも、緊張と不安でいっぱいだよ・・・。

「で、話に入るけど・・・。いいかい？」

「は！はい。大丈夫です！」

私は我に返ったように返事をした。急に話しかけないでよ・・・。びっくりするから・・・。

「君達には、『これ』を付けてもらう」

と野呂先生が言ったと同じように、蒼先輩と空痲さんが動き出して私達の目の前で『それ』を差し出した。蒼先輩は血夜牙の方へ、空痲さんは私の方に渡した。

『それ』はキラキラ光っていて綺麗だった。それは指輪だった。血夜牙は赤色の指輪。私は白色だった。

「それは、『ＶＨ』のしるしだ。それがあればいつでも夜の学園に入れるし、色々役立つ。肌身離さず付けておくといい」

「はい」

よく見ると、二人もしていた。蒼先輩は青色。そのまんまだな・・・。空痲さんは緑色。エメラルドグリーンぽい。

「あと、時々『ＶＨ』で集まる時がある。その時はココに集合。あと、学園の中では『ＶＨ』のもめ事は一切禁止。それと・・・・・」

長々と注意することなど、今後の話でちょっと疲れてきた・・・。

まだかな、この話・・・。

「あと、彩埜さん」

「は、はい！」

「貴方は、これから学園の寮に住んでいただきます。『ＶＨ』の期間だけね。もし『ＶＨ』を抜ける時は別だけどね。君の書類について調べたところ、親は居ない、親戚も居ないので一人暮らし。でも、学園の寮では『ＶＨ』の皆が居るからさびしくないと思っていたんだけど・・・。それに一回家に戻って学園に戻るのも大変でしょ？大丈夫、そんなに不便じゃないし、ちゃんとした設備もしてある。一人一人の部屋にもシャワーもあるし、テレビ、台所など欠かせないものはちゃんとある。お金もちゃんと出るよ？一ヶ月５万で・・・」

「ちょ、ちょっと！待って下さい！いっぺんにそんなに言われても・・・！」

そうよ、私が返事をしたらズラズラと台本みたいに喋って！半分聞いてなかったよ！ちょっと吃驚して！でも、学園の寮に住む？本当に大丈夫なのか？崩れたりしないのか！？いや、それとも監視されてパソコンでその一日を公開されたりなんてことは・・・！！

「彩埜さん？」

「え！？あ、あの。その・・・。えっと・・・。家賃とかは・・・？」

私は少しもじもじしながら言った。それに答えて野呂先生は優しく微笑んで答えてくれた。

「掛かりませんよ？全部は学園で支払ったりするので心配なく。それに、一人で過ごすと危ないでしょ？血夜牙君と一緒だからね」

野呂先生は冗談で言ったと思うけど、血夜牙は本気にしていた。

「先生！私はそんな破廉恥なことはしませんよ！」

「私にキスをしたじゃない！！」

あれは破廉恥ではないのかよ！！

でも、野呂先生がああ言ってるし、心配は無いとして真剣に考えないとな・・・。本当に学園の寮に住むか。そのままの暮らしにするか・・・。でも私が『ＶＨ』に入りたいなんて思っていないし、まして、戦いたいとも思わない・・・。

危なく死んじゃうかも知れないのに、無理に危ないことに首を突っ込まなくてもいいはず・・・。

「私は・・・」

本当に私はこのことに関係は無いはず。だから・・・。

「『ＶＨ』を辞めます」

野呂先生の表情は変わっていなかった。唯一変わっていたのは血夜牙の方だった。

「何故だ！彩埜！何故辞める！？」

血夜牙は私の肩を掴んで言った。御免ね、血夜牙・・・。

「私には、関係ない。それに、私が入ったところで邪魔になるだけよ。何にも役に立たない・・・」

私は頭を下げたまま言った。だって、しょうがないじゃない・・・、私が入ったところでどうだって言うの？

「だが・・・！」

「もう決めたの。私は『ＶＨ』に入らない」

私は元気に笑って指輪を取って、野呂先生の机の上に置いた。何にも感じないような顔で私を見て言った。

「本当に、『ＶＨ』に入りませんか？」

野呂先生はニコッと笑ったままの顔で私に言った。

「御免なさい」

と言って、くるっと回ってその場から離れようとした。すると急に腕を掴んできた。血夜牙だった・・・。

「・・・・・」

黙ったままの血夜牙の顔は真顔だった。多分心の中では悲しんでいるのだろう・・・。

「御免、血夜牙」

と言って血夜牙の手を解いた。すると後ろから声が聞こえた。

「待っていますよ。彩埜さん」

それは野呂先生の声だった。その声はいつまでも私の頭の中に響いていた・・・・。

「何ボーっとしてんのよ彩埜」

「あ、月世」

私の目の前に顔を近づけた月世にも驚かずボーっとしていた。何で

だろう。何も考えられな
い・・・。

周りから大きな話題で盛り上がっていた。

「ねぇ！聞いた？私達のクラスに転校生が来るんだって！」

「それに美形らしいよ！」

「私、その人っぽい人朝に見かけたのよ！」

「えー！いいなぁ！」

「でもね、女連れだったのよ！」

「えーショック！！」

「誰だったのよ！」

「確かね・・・」

といいかけた瞬間に

「こらー！座りなさい！チャイム鳴っているでしょ！？」

大きい声を張り上げながら言った。結構性格は良い方だけど、あと
体つき・・・。でも、お気
に入りの男子は離さない噂があるらしい・・・。

一人の男子が手を上げながら立ち上がった。

「先生―。飯田君が居ないんですけどー」

「飯田君は急用で外国の方へ転校しました」

周りからはえーと言う声が聞こえた。でも、その原因は知ってる。飯田君は・・・。

思い出すだけで、怖かった。もし、私が『ＶＨ』に入っていたら、こんな事いっつもあると思うと嫌になる・・・。

関わりたくないと心から思った。

「飯田の奴、少しは置手紙とか、誰かに話せば良かったのになぁ」

「だよなぁ」

と周りの男子はふざけて言っている。ように聞こえた。彼らはどうして飯田君が居ないのかは、知らないのだから・・・。

「静かに！」

と先生が話を止めた。

「先生！今日は転校生が来るんですよね！？」

一人の女の子が大きい声で言った。

「ココのクラスはそう言うのは早いんだよねー。まったく。勉強もこういう風に興味があればいいのに」

先生がため息をついていた。すると男子は

「それは無理でーす！」

とふざけて言った。するとその男子にチョークを投げて、それはお前だけだ、と言った。

周りは笑いに包まれた。こんな風に毎日を過ごしていると、いつの間にか不安の心は晴れて、私も笑っていた。

「はいはい！ほら、お前達も早く転校生を見たいだろ！？」

先生は活きよい良く黒板を大きく叩いた。

「みたいです！」

女子のほとんどが合わせて言った。月世は興味なさそうにしていた。まぁ、あんたは不義君一筋だものね・・・。

「じゃぁ、静かにする！」

と言うと一瞬にして静かになった。

「じゃぁ、入って来て」

と先生が言うとゆっくりと血夜牙が入ってきた。

「名前と趣味、特技など言ってくれるかしら？」

先生の声が色っぽく聞こえるのは何故・・・？

「私は血夜牙。趣味は動くこと。特技はスポーツ全体で」

女子の皆の目がとても逝っていた・・・。ははは・・・。すごいな血夜牙・・・。

「ねぇ、彩埜。あの人いけてない？」

ちょ！あんた！不義君命じゃなかったの！？

「月世！あんた不義君命じゃなかったの！！？」

「それはそれ、これはこれよ！」

早変わりの人だな・・・。本当に不義ファンに入ったのかな？？

「不義君はツンデレだけど、血夜牙君ってデレっぽくない？」

そ、そうなのか？私には分からないけど・・・。てか、それは腐女子発言では！？

「じゃぁ、血夜牙君は彩埜さんの隣で」

「はい」

ちょ、ちょっと待ってよ！なんであんたが私の隣なの！！

しかも、ちょっと嫌な空気だし・・・。

「隣宜しくね。彩埜」

血夜牙はニコッと私の方を見て笑顔を見せた。さっきのことは忘れたの？

私血夜牙にひどいこと言ったのに・・・。

「血夜牙、あのね・・・」

「何！？やっぱり戻ってきてくれるのか！！」

「い、いや！そんなこと言ってないし！」

っは！ま、まて！何か後ろと前に痛い視線が！！こ、怖えー！

駄目だ！今血夜牙と話したりしたら、女の子達に殺される！！

「彩埜さん。血夜牙君今日、教科書ないから貸してあげてね」

先生が少し悔しそうに言っていた。ここの学園って怖いなぁ・・・。

でも、何で先生が悔しが

ってるの！？

周りの女子は黒板じゃなくて血夜牙の方を見ていた。すごい視線だな・・・。

『ＶＨ』を辞めてしまったら血夜牙との関わりも無くなってしまう。
でも、それでもいいや。私には関わりは無いもの・・・。でも、本当の私はそんなのやなはず
なのに・・・。

どうしよう。私・・・。

血夜牙は心配そうに彩埜を見ていた。

彩埜は血夜牙に気づかれないように帰ろうとした。でも、今日のことがあったせいか、学園の
女子ほとんどに血夜牙との関係を聞かせないといけない事になって、大変だった・・・。ただ
の従兄(いとこ)って事にしたけど・・・。

何か今日は疲れた・・・。

でも、そういえば、血夜牙って『ＶＨ』の専用の寮だっけ？もう私が心配しなくてもいいんだ
よね・・・。もう私は必要ないよね。なんか苦しいな・・・。

「彩埜」

後ろから声が聞こえた。圭介の声だった。そういえば、あの時（Ｖ

Hに初めて会ったとき）以来だった。かも・・・。

「どうしたの、圭介」

圭介は少し照れくさそうに言った。

「あ、いや・・・。その・・、今日はアイツいねぇのか？」

アイツですぐ分かった。血夜牙のことだと・・・。この頃気になるみたいなんだよね、圭介・・・。

「うん。いないよ。もう私必要ないし」

そう、私は・・・血夜牙はもう私の事必要ないから・・・。

「なんだアイツ、急に彩埜に会ったばっかで、すぐ『サヨナラ』かよ。ふざけるのは顔だけにしろってな！」

いや、顔はふざけているより、カッコよすぎで困るんだよね・・・。

でも、私の顔は笑っていなかった。何か胸が痛い。なんで？だろう・・・。それに違和感が・・・。

肩に触って私は目を大きく開いてハッと気づいた。いつも肩にかけているはずの部活道具が無

かった。たぶん、部室に置いてきてしまったのだ。いつもこんな事無いのに今日は何か違う感じがしてしょうがなかった。

「忘れ物した！そんじゃぁね！圭介！」

「お、おい！」

圭介はまだ言いたそうな感じだったが、急いでいたせいかその声は彩埜に聞こえていなかった。

「もうすぐで、門閉まるんだけど・・・」

時計は６時５５分を回っていた。学園の門が閉まるのは７時と決っていた。

彩埜は部室に入り、自分のロッカーに手を伸ばし、開けた。

「あった・・・」

ロッカーの片隅に横たわっていた部具（ぶぐ）があった。

本当にボーとしていたんだと再び思った。本当に御免ね。貴方を置いていって帰ろうとして・・・。

もうすぐで暗くなりそうだから早く帰ろうとした。ドアノブを回そうとするとビクともしなかった。

「え！？」

普通に回すと開くはずのドアが開かない・・・。どうして？まさかこんな時に壊れたの！？

本当に今日はついていないと思った。だんだん不安が込み上げて怖くなった。こんなときに血夜牙が居てくれたら・・・。

って！何で血夜牙なの！？と自分で突っ込んでいた。部具を強く抱きしめた。

「お父さん、お母さん・・・」

思わず親を思い出す。そういえば、もうすぐで命日だね。お母さんの大好きなユリを持っていくね？お父さんの好きなお酒持って行ってあげるね？

お父さん達が何故死んだことは知らない。でも、お父さん達が私に残してくれた物がある。いつも胸に付けているネックレス。鍵のような形をしている。それを大事に身に離さず持っている。

私はネックレスを見て楽しかったことを思い出していた。

すると耳鳴りがして次に回りの空気が変わった。
何か不思議な感じだった。さっきまでも温かい空気が急に寒く感じてきたのだった。
「っ・・・！」
耳鳴りがもっと酷くなった。何かが変だった。不安より恐怖が強くなってきた。
それに人の気配がしてならない。私が入ったときはたしか一人だったはずなのに呼吸の音が空気を凍らせてくる。
「人間か？」
暗いところから声が聞こえた。姿が見えない。でも居るのはたしか。私はその場で立った。足は少し震えていた。恐怖と寒さのせいで震えていた。
「だ、誰？」
私は問いかけるように言った。そしてコツコツっと靴の音が聞こえてきた。そして近づいてくることも分かった。寒さが倍になった気がする。
そこには男の人が歩いて来ていた。私はその人に視線が離せなかった。その人は何もかも冷たいように見るような目をしていた。冷気で包まれているようだった。

それに肌が白い。真っ白
な雪のようだった。

私は背筋が凍りそうだった。たぶんこの人のせいだと思った。それに息が白い。感覚が無くなっていきそうだった。

男は彩埜の方に手を伸ばそうとした。抵抗できなかった。全部の精神、神経が言うことを利かなかった。

「お前、血夜牙と契約したのか？」

何を言っているのか分からなかった。でも血夜牙もそんなこと言っていたような・・・。でも
、、契約，，って何？

男は下ろした手に鋭い氷柱（つらら）のようなものを握っていた。それをどうするすかはすぐに
分かる。私を殺すために出したと瞬時に理解し恐怖が増大した。

「・・・・・」

男も無言で手に握った氷柱を私の顔の近くに向けた。どうすることも体が動かなかった。

男は目を細めて言った。

「あいつの何処が好かった？」

それはたぶん血夜牙のことを言っていると分かった。何処が好かったって・・・。無理やり契約されたのに・・・。

それに話せるような感じじゃないしね・・・。

「普通に人間、魔人を傷つけるような奴に。俺達、、間外者,,も平気に殺す・・・」

と途中で言うのを止めた。その先は聞いてはならないような気がした。

でも、血夜牙がそんなことする人じゃない・・・。

「血夜牙はそんなことしない！血夜牙はいい人だし、そんなことしたら私！許さないもの！」

思わず声が出た。それにさっきまでの冷たさも恐怖も無くなった。血夜牙のことを思うと心があったかくなってきたのかもしれなかった。男は手に有った氷柱を消した。そしてじっと私の方を見ていた。

「お前は、、間外者,,を嫌うか？」

突然の質問で吃驚した。何故そんなことを聞くのかも疑問だったけど・・・。

「別に、嫌いとか好きとかじゃなくて、酷いことをする人が嫌いなことだけ。血夜牙だって酷

いことをする人は嫌いなはず。中にはいい人もいるし、悪い人もいるってことだと思う」

そう、中にもいい人悪い人がいるはず。全部悪いわけじゃない。でも、男は悲しい顔をした。

「貴様みたいな奴が側に居て欲しかった」

「え？」

一瞬言ったことが嘘のように聞こえた。何故そんな悲しい顔をして言ったことに疑問もあったけど、急にそんなこと言ったことに一番吃驚した。

すると、大きい音が鳴り響いた。私は小さな悲鳴を上げた。それは部室の壁を壊した音だった。目を開けてみると、男が私の壁になっていた。心のなかで沢山の疑問を抱えたまま男を見ていた。

「彩埜を離せ・・・！寒冷！！」

その声は血夜牙のものだった。そして怒りが込み上げてきそうな声で怒鳴っていた。私はその声が懐かしくてホッとした。男は私を抱き上げて血夜牙の方を向いてこう言った。

「血夜牙、久しぶりだな」

男の目はまた冷たく染まっていき、冷たい笑い顔を見せた。険悪な

空気を漂(ただよ)わせて
いた。

「彩埜を離せ！今すぐに・・・！」

血夜牙の目も真っ赤に染まっていた。二人の目が光輝いていた。ココに居るのが嫌になるほど
の空気だった。私は頑張って息を殺していた。と言うより息が出来ない・・・。

「こいつがお前と契約したとしても、守っていないと取られるぞ。
また俺に」

言っている事が分からない。でも、これだけは分かった。こいつは
血夜牙の大切な人を奪った
奴だと。こいつの言葉全部が嘘に聞こえてきた。

、、貴様みたいな奴が側に居て欲しかった”

あれも嘘だったって事になる。頭の中にその言葉がめぐりまわって
いる。でも、その気持ちと
反対に男から離れて血夜牙の方に向かって走っていった。でも、そ
れを阻もうと前にあの男が
現れた。

「誰が逃がすと言った？」

冷たい目で私を見下ろしていた。恐怖で体が固まってしまった。今動いたら殺されると思った。

「寒冷！貴様！」

血夜牙の怒りが強くなっていた。いつもの血夜牙ではなくなっていた。

「お前が苦しむところを見たいんだよ。、、間外者”による逆襲のために・・・な」

ぎゃ、逆襲？血夜牙が何をしたの・・・？この！悪趣味野郎！！

私は無意識で部具を取り出し、弓を男に向けた。男は怯むことなく見つめていた。男は笑っていたままだった。

「それで俺を殺そうと？無駄なことだな」

男は彩埜を侮辱するような感じで言った。自分もそう思っている。この人にこんな事通用しないって事。でも、自分の身を守ることはしないと・・・。

「お前にも悲劇を見せてやろうか？」

男がスッと手を上げると、二人の人間が見えた。だんだん近づいてきてその姿がやっと分かった。

「お、お父さん？お母さん？」

そ、そんなわけない。そんな・・・！お父さん達は死んだはずなのに、何でココにいるの・・・？もしかしてこの人の幻影なの？でも、お父さん、お母さんだった。

「そう、お前の親だ。嬉しいだろ？」

男は彩埜の耳元で優しく言った。

「俺に付いて来るなら、また楽しい暮らしが出来るぞ？」

「え？」

騙されているようだった。でも、またお父さんとお母さんと楽しく暮らせるならとても嬉しい。本当が嘘なのかも区別がつかなくなってきている・・・。

「彩埜。俺に付いて来い」

その言葉に心が奪われたように、だんだん意識がなくなってきた。

小さい頃、どんなに夢を見てきたことか・・・。お父さんとお母さんで楽しく旅行したり、話したり、ドライブしたり、食事も料理も楽しく暮らせる夢を見ていた。夢でもいい、お父さんとお母さんと一緒に居られるならそれでいいと思っていた。

『本当に？』

（え？）

急に声が聞こえた、優しい声。回りを見て何処から聞こえたのか探していた。自分の胸を見ると光っていた。

ネックレスが輝いていたのだった。鍵の取っての宝石が光を放っていた。

『彩埜？』

「え！？」

急に声が聞こえて吃驚した。その声が鍵から聞こえてくることに気づいた。

『彩埜、貴方はそれでいいの？』

ど、どういうことかあまり掴めなかった。

『今貴方が必要な人が居るはずよ？その人を無視して、貴方の幸せだけ望んでしまうの？』

「どういうこと？話が・・・・！」

てか、この人は誰なの！？

『私は貴方と一緒に、あの頃に戻りたいわ』

その言葉で少し見当が付いた。この話で私の親だと分かった。

「もしかして・・・・、お母さん？」

『でもね、貴方は、、今”を生きなければならない。昔じゃない、今よ。彩埜』

私の質問を無視して話した。でも、その声は優しく穏やかに聞こえた。懐かしいその声はどこか悲しそうだった。

「今・・・を？」

私はその意味が少し理解できた。私が今思っていることは間違っていること。あと、お父さんとお母さんとはずっと暮らせるわけが無いことも・・・。昔に戻ったとしても、楽しく一緒に暮らせるわけが無い。思い出だけでも一緒にいたいと思うのに、楽しい思い出がないのも悲しいけど、親が悲しい顔をしている思い出だけは嫌。偽者の思い出なんていらない。

『そう、今。貴方はこっちの世界の人じゃない。今の人間なのよ？だから・・・』

そう言うと白い服を着た女の人が一瞬にして私の目の前に現れた。
その女の人は私の方を見て
笑った。とても優しい目をしていた。どことなく懐かしい感じがした。

『今を生きて。彩埜』

回りが暗くなり急に明るくなった。

ちゃんとした意識が戻ってきた。目の前に血夜牙が居た。そして後ろに冷たい声が聞こえた。

「さぁ、彩埜？血夜牙を殺せ」

男は私の肩を触り、顔を近づけた。そして私の手に触って武器を渡した。それは冷たく、鋭い
氷の剣だった。

私は一度目をつぶった。そして意識をしっかりさせた。そして私は血夜牙の方を見て言った。

「わたしは、あなたを倒す！」

と言うと後ろを向き男に切りつけた。だが、瞬時に男は避けて距離を置いた。男はまた冷たい
笑い顔を見せた。

「親と一緒に暮らしたくないのか？そいつを殺したらお前が望んでいることが現実になるんだぞ？」

男は両手を上げて叫んだ。

「私が望んでいることは、血夜牙と一緒にいること！！」

私ははっきりと言うと男の方に走っていった。だが男はそれも避けて彩埜の手首を掴んだ。

「本当にいいのか？親と楽しく暮らせるんだぞ？」

男は私の耳元で優しく語る。冷たく、話す。でも、あの言葉を思い出した。

『今を生きて。彩埜』

あの言葉はとても温かく、何よりも愛を感じた。私はキッと男を見た。

「私は今を生きる！お父さんとお母さんは死んだ！真実を見ないことはしない！」

と男から無理やり手を解いて、幻影のお父さんとお母さんに氷を投げた。それは見事に当たって、ガラスのように砕けた。そして回りに月明かりが現れた。

男は笑う。そしてこう言った。

「あの女みたいな目をして、本当にムカつくな」

これが男の本性だと思った。

すると血夜牙は私の前に出てきて、私を守るように前に出た。

「寒冷！お前だけは・・・！」

寒冷は血夜牙に優しく微笑んだ。でも、その微笑みは不気味なほどにその場を凍らせた。

「ゆるさない？血夜牙お前だけは俺が殺す。俺達、、間外者”を踏みにじったこと、俺の大切な人を失ったことも！！」

え、この人も大切な人が居たの？そのことに驚いた。なんだが二人とも同じように感じた。

そうすると、寒冷に目掛けて攻撃が起こっていた。だが、寒冷は素早くそれを避けた。これは『ＶＨ』の攻撃だった。

「大丈夫？彩埜さん」

と後ろから声が聞こえた。その声は空痲さんだった。煙で見えなかった４人も居た。ＶＨの後ろに寒冷が着地した。

寒冷はここにいた全員の顔を見ていた。

「誰だアイツは」

蒼が警戒そうに問いかけた。私はよく分からない。でも血夜牙が口をあけた。

「アイツは魔界で、いや、、間外者”の中では王と言われている。寒冷。アイツとはいつも城で会っていた。そして、アイツが私の父、母を殺した。魔界では死刑になっている者」

うそ・・・。こいつが血夜牙のお父さん、お母さんを殺した人。私は体が震えて止まらなくなった。

怖いのもあったけど、その冷酷さが体に染み渡った。怖いだけじゃない、恐怖、不安、死が回りに漂っていた。

「少し計画がずれたけど、まぁまぁ、良い方だったと思うけど・・・。まぁいいや」

と寒冷が言った瞬間に5人ぐらいの人が寒冷の周りに現れた。その人たちは後ろ姿しか見せてくれない。こちらを見せない様にしているようだった。

「俺は復讐をするよって言いたかっただけ。この学園を中心として、この世界と魔界を支配する。これがお前に送る復讐。覚えていて彩埜」

急に私の名前を言ったことにも吃驚したけど、冷たい声で言われて

震えた。

「君はこっち側の、、人間”だ。最後に迎えにくるよ」

また冷たく微笑む。そう言って一瞬にして寒冷、５人組みも消えた。

その場が静かになり、冷たく風が吹いた。それは心も体も冷たくさせるようだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5857c/

学園夜業

2010年10月28日03時47分発行